**弘法大師空海の像 (13世紀)**

日本仏教の発展に大きく貢献した僧侶、空海（774-835）を描いた像である。空海は、真言密教をはじめとする日本文化に多大な貢献をした。921年、醍醐天皇(885-930)は空海に「弘法大師」の諡号を与えた。死後、空海は崇拝の対象となり、その無比の知恵、不屈の意志、超能力などについて多くの物語が語られた。いくつかの説によると、高野山の真言宗本部にある石窟で深い瞑想（＝永遠の禅定）にふけりながら生きているという。

この像は、1284年に空海がこの世を去ってから450年を記念して作られたものと考えられている。空海は僧衣をまとい、右手には密教の法具である金剛杵を持っている。左手には数珠を持っている。

興味深いことに、この像の中には14世紀のものがいくつか納められていることが判明した。これらは、像の制作から数十年後に修理された際に内部に入れられたものと思われる。その中には、観音経の写しや、修理の資金を出した人たちの名前が書かれた文書もある。

空海は国内外を旅して学び、元興寺にも滞在した。空海が宿舎に座っていると、春日明神という神が鹿に乗って部屋に現れたという記録がある。春日明神は、空海の威光に惹かれて、寺に保管されている曼荼羅や遺物を守ろうとした。空海がいた部屋は現在、禅室の最西端にあり、「影向の間」と呼ばれている。